

ノスタルジックなガス灯の風景 —有松・半田に当時の施設—

■開化の明かりガス灯

日本で初めてガス灯が点いたのは、1872（明治5）年、横浜の実業家高島嘉右衛門によって横浜に点けられた。

当時のガス灯はガスが弱く噴き出しているところに火を近づけて、直接点火するものであった。そのため、街路灯や軒灯では点消方（または点灯夫）が、夕暮れになると、こうもりのように現れて、点火棒を持って、火を点けて廻った。それは開化の時代の風景であり、当時の錦絵や版画などにもしばしば登場している。

■名古屋地区のガス灯

名古屋でガス灯が付くのはずっと遅れて、1907（明治40）年にガスの供給が始まった。当時は、ガス灯の方が明るく安かったので、電灯会社と明かり競争しながら拡大していったが、1912年頃から金属線電球が実用化されると、ガスは熱用中心になっていった。

■今に残るガス灯設備

当時のガス灯設備は今も見られる。緑区有松の竹田嘉兵衛家には、明治期のガス灯が残っている。有松にガスが引かれたのは1911年5月で、電気が引かれたのは1912年2月であり、ガスの方が早かったのである。

また、半田の中糞半六邸にも2個所にガス灯設備が残っている。半田では、1910年6月に知多瓦斯が開業し、電灯会社が開業するのは1914（大正3）年1月であった。中糞半六は知多瓦斯の取締役でもあった。それから、金山駅南広場正面には、ガス灯（東邦瓦斯建設）が建てられているので、帰路、ご覧になって行かれるとよいだろう。



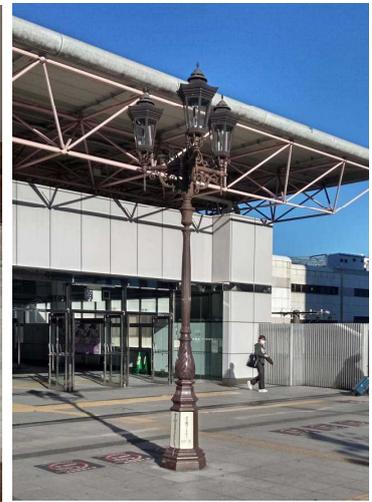
東京・銀座通りの点灯夫を描いた浮世絵 出展：『東京瓦斯七十年史』



竹田嘉兵衛家のガス灯



中糞半六邸のガス灯



金山駅南広場のガス灯

（浅野伸一）